

# 赤鹿子



5月号

鈴鹿呂仁  
拾掬集 その五十六



嘸遠春九忍臥引言  
 御所吟行五句  
 り州北門びすひ訳の二転  
 のの風閉音目に算を子には教へず親すずの  
 空の洲のづのには坪庭に足る覗くめ恋  
 は浜に行朝浅沓坪庭に足る覗くめ恋  
 いにき敵沓坪庭に足る覗くめ恋  
 ち寄場ふふたに足る覗くめ恋  
 ませ失ごとつ足る覗くめ恋  
 まいるふとつ足る覗くめ恋  
 建春猿靈花る覗くめ恋  
 礼のケのの覗くめ恋  
 門雲辻空陰花め恋

吳採打片早早  
 と決ち恋春春  
 越寄はの小街  
 のマセるの街  
 イクは卵は疼  
 タ合が先きに  
 戰がに日記の  
 虬戦花さく色  
 ののらら見み  
 駅紐貝貝せす

引潮の能島が渦の鹿尾菜刈る  
青饅や某日として恙なし

啓蟄や穴ひとつづつ植木鉢  
はんなりと口無瀬戸の涅槃闇  
漁の一舟ひろげゆく春暁  
鹿尾菜刈る

近詠

和田照海



雀の子どう転んでも唄となり  
古草や明日香は謎の史をもちて  
芽吹く日の背すぢ辺りの重さかな  
梅咲いて音符をあげる御所鴉

囀や四角四面の五線譜  
雀の子  
鈴鹿仁



松本 鷹根



塩貝 朱千

和氣陽氣

酒天童子

ワインレッドも滅びゆく彩寒昴

木蓮の花芽犇く友好碑

栖む気配なき如月の池覗く

酒呑童子てふ真つ赤な椿鳥を呼ぶ

## 近詠

紅足の鳩の寄り来て水温む

犬ふぐり踏み郷愁の畦廻る

一戸への径を探して初うぐひす

豌豆の花咲き狭庭和氣陽氣

露のたう二つに大き案内図

やんはりと樹林太らす春の雪

以前、裾あげと言えば妻が市販のテープを使いアイロンで張り付けていたような記憶があるが、今では買ったお店で裾あげをして貰っているのが多いと思う。その時、店員の人が待針一本で長さを調節している。日常的な動作で余り気にも留めなかつたが、作者はそこに着眼した。赤い待針から赤いマニキュア、赤いルージュへとイメージを膨らませていくと「雪をんな」に辿り着く。裾あげのズボンの色は鮮やかな真っ白に違いない。

割り算の余りは知らず桃の花

千葉高野春子

## 英華採集

裾あげの赤い待針雪をんな

小学校の算数は、九九の掛け算の後に割り算を習うのだろうか？一つの呪文のように覚えた掛け算と違い、割り算を覚えるのは殆どの子供達が挺子摺るのではないだろうか。割り切れない問題では特に「余りがいくつ」という答えに辿り着くには時間が掛かるのかも知れない。掲句は孫の女の子に教えている母親の困った顔が目に浮かぶ。季語の「桃の花」に女三代の微笑ましい構図が見えてくる。

生涯に切字はいくつ年歩む

寝屋川寺元流泉

切れ字と言えば、芭蕉に「切れ字に用ふるときは、いろは四十八字皆切れ字なり」という名言がある。作者は、今までの来し方に切れ字はいくつあつたのだろうかと振り返っているが、この切れ字は人生の節目を比喩として使つてゐるのであろう。様々な出来事が脳裏に浮かんだに違いない。嬉しい事は兎も角、悲しい事に思いを馳せながらこれから余生にその「切れ字」が無い様に生きていきたいと願う作者の思いが「年歩む」に凝縮されている。

青梅金子野生

水温む 藤岡紫水 春雷

丸井巴水 寒明けや吉田の神を神棚へ

白梅にただよふごとき蛾眉の月  
塔の反り締める陽光春寒し

結び目を背中へ廻し冬牡丹  
隠れ住む山村三家雪重り

京菓子に絹の手ざはり春立つ日  
春の灯をゆたかに洩らす花頭窓

腹の虫押さへ込みたる春の雷  
小雪舞ふ山湯帰りの丸太橋

夏落葉 沼田巴字 節は春 植村蘇星

牡丹の胎を思はず花芽なる  
空に展げし嬰の拳や柿若葉  
新緑へ飛び込むこころ身も軽く  
若楓若死にをせし父のこと  
闘つて生きる術策夏落葉

九合目挑む眼差し青き踏む  
句は心生かされ生きて梅七分  
猫やなぎ瀬音かるやか詩ごころ  
春耕や一日一善陽は西に  
生かされて心のゆとり節は春

毛糸玉 北川孝子 立春 高木晶子

昭和てふ時代名残りの毛糸玉  
深深と夜の更けゆく夜のみかん  
摺り粉木にまだ木の匂ひ二月過ぐ  
やはらかに昆布煮上の春休暇  
今日も亦かくてありけり夜のみかん

注連縄を外し初老の友来たる  
もう誰も育てて呉れぬ路の蔓  
節分の鬼より激し人の息  
立春のバスの傾く八坂前  
立春の香水として堰き止めず

淑氣 直江裕子 立春 高木晶子

梅咲いてまだ年寄りをやつてゐる  
蓋とれば誰のものでもない淑氣  
人日や数字で呼ばれることに慣れ  
何かもの言ひたげなままの手袋  
春隣ラップの端が見つからぬ

立春の明るさ生垣の崩るまゝ  
すれ違ふ恋猫人を揮らず  
富士の嶺を遠く春田の打たれをり  
逆光のさざめき鴨の群帰る  
春の雷地を裂く音も落しけり

白木蓮

奥田 筆子

冬 蝶

村田 あを衣

噛み癖のあるコートや捨てちまおうか

こころてふ大きな器白木蓮

北欧の羽毛三月空を見い

おしゃべりの裸となり春炬燵

理系女の友風除けとして雪をんな

麦 秋 井上菜摘子

初夏のおひとりさまは軽く浮遊  
音合せの途中をひらく白牡丹  
麦秋を走る走る恩返さねば  
まだ誰もはいらぬお墓白藤垂る  
もらひ泣きしてをり苺つぶしをり

風に夢託し葉裏の冬の蝶  
夢あらば翔てよ冬蝶日溜りへ  
冬蝶の翳をたしかむ身のあり処  
離愁かな視野よりこぼる冬の蝶  
冬蝶の渡る思案の夢の橋



# 京鹿子集



鈴鹿呂仁選

## 大屋根の分厚き雪解永平寺

寒夕焼鉄塔誰の墓標なる

水仙の香る電話の向かうかな

冬桜仮の世に生き手記綴る

綿虫の高さで失踪思ひもし

着ぶくれてこだはり一つづつ捨てる

赤い橋渡れば母郷雪解風

雪解しづく追憶にまた涙して

イヤリング外す余寒の風の中

料峭や歩いて行ける友を訪ふ

京田辺 山中志津子

星くずを掬へばこぼる雪解風

城陽 驚山 珀眉

春暁のとろとろとつて置きのゆめ

日永かな大路小路を上る入る

自画像の遠景どこもおぼるなる

余寒なほ急須の蓋の穴ひとつ

万両や無効となりしバスボート

口止めをされし言の葉寒昇

読み止しへ袖置く忘れ上手かな

横顔に初髪といふ角度あり

峠抜ける風を逃さず懸大根

福山 亀井 福恵

萬両や無効となりしバスボート

口止めをされし言の葉寒昇

読み止しへ袖置く忘れ上手かな

横顔に初髪といふ角度あり

峠抜ける風を逃さず懸大根

## 音立てて堰越ゆしぶき雪解川

亀鳴いて明日香美人に疎まるる

蒲公英や飾らぬ色は母の色

のたりのたり象の影ゆく春の風

百千鳥大枝はねる神の杜

ふきのたう目と目で足りるテレパシー

はだれ陽のまだら遊びや梅ふふむ

梅見月寄り添うてくるピタゴラス

芽柳吹く岸に寄せくる水心

余寒なほ陶狸徳利いつも空

如月の光のシャワーみどり児立つ

「てにをは」に躊躇夜の朧かな

地球儀と語る少年東風の窓

如月の光の束を窓窓へ

残齡へささやきかける寒北斗

寒林の行き交ふ木靈鬱ひとつ

乗り合はず兎の耳の冬帽子

華頂山寒の極みの男坂

落合ひの水音解けねこやなぎ

薄墨の空へはにかむ姫椿

福知山 西村 白杼  
京都 菊池 和子



## 裾あげの赤い待針雪をんな

冬虹へ傾きながら一両車

鳩サブレはんぶんこするちゃんちゃんこ

ぬひぐるみに貰つてしまふ春の風邪

割り算の余りは知らず桃の花

冬銀河静かに胸に燃ゆるもの

ひとりゐてひとりにあらず冬の海

冬ざれや故郷に帰るところなし

生涯に切字はいくつ年歩む

クリスマススルータ餉に青魚

数へ日ぞブルーシートのままの屋根

紙を漉く波と遊ぶと笑む匠

舞初白粉匂ふ舞台裏

去年今年吸呑みを待つ父の唇

冬ぬくし老舗の主人祖父を知る

凍て寺に仁王立ちなる警備員

アリゾナ 伊吹 之博

千葉高野春子  
寝屋川寺元流泉

高槻安田優歌  
大阪本郷公子

青梅金子野生

PDF=俳諺の salon

PDF=俳諺の salon